2.1.プリント班概要

山田 慎也

本年はプロジェクトの２年目として、プリント班では１年目の調査検討を引き継ぎつつ、それぞれが取り組む課題を深化させており、来年度の総括にむけての展望も含め、現状の成果を提示している。

山田慎也報告「作法書に見られる情報とその正統性」では、昨年度は近代に成立した職業軍人という特定の対象にむけて刊行された葬儀の作法書を中心に、新たに成立した新中間層が求めている情報とその生活様式について検討を行った。そこで本年は、情報を求める主体がより拡大し一般化していく中で、儀礼の実施における変化とその正統性について検討を行った。対象として取り上げたのは、当時 300 万部の大ベストセラーとなった塩月弥栄子の『冠婚葬祭入門』（1970 年、光文社）である。その内容を見ると、儀礼の典拠などよりも具体的な実践が重視され、儀礼が変化しつつある場合には折衷案を提示し、旧来の儀礼と新たな展開との折り合いを提示していることを指摘した。そこで重要なのが著者の属性であり、茶道家元の長女という出自で茶道教室を運営しながら、現代的なキャラクターという特質が、その正統性を担保していることを考察した。

問芝志保報告「冠婚葬祭マナー本に描かれた建墓と墓参りの作法」では、岩下宣子という現代の作法家の監修書を系統的に検討することで、変化していく作法の様相を照射し、現代社会における規範性の拡大とその消費の状況を明らかにしている。その事例としてとりあげたのが建墓と墓参りである。建墓においては、それを前提としつつも次第に永代供養墓、樹木葬、宇宙葬など多様なスタイルを肯定し子孫の利便性の考慮など、新たな規範が提示されているという。また同様に墓参についても、春秋の彼岸は当初から大切な機会とされる一方、盆は先祖を家に迎える行事であり、墓参については当初記載されていなかったが、次第に墓参が強調されるようになっているという。こうして、時代による規範の拡大について検討を行っている。

大場あや報告「鹿児島県における冠婚葬祭の「作法書」と墓参の規範化」では、近世期には真宗を禁じ維新期には廃仏毀釈によって全寺院が廃寺され全僧侶が還俗させられるなど宗教的に激変した鹿児島県を事例として、墓参の規範化と作法書の関連を検討している。すでに先行研究において、この地域は日常的墓参と豪華な供花の維持については、嫁の役割として先祖への崇敬とよき嫁としての表現をするものとして維持されてきたことを指摘する。しかし、地域のマナー本においてはこの件は取り上げられておらず、マナー本を必要とする世代の相違と墓参習慣の断絶を推測している。

土居浩報告「真宗の給仕式にみる葬祭領域の情報化」では、真宗大谷派で公式本的な取り扱いをされている２つの一般向け作法書『真宗の仏事』、『仏教・仏事のハテナ？』を事例として、情報化の質的相違について検討を行っている。葬祭領域の説明において、前者は真宗的意義の説明が前面にあるのに対し、後者は弔辞弔電では「冥福」を使わない、清め塩や茶碗を割るなどは「迷信にまどわされている」など、俗事との関連で断定的な記述が多いという。ただし、これは全く異なることが述べられているわけではなく、前者では問われないような前提の

日常生活との関連に力点が置かれていると述べる。こうしたことから、葬祭領域の「情報化」を考える際には、誰に向かって何のための情報化なのかといった根本的な問題が浮上すると指摘し、来年度の総括に向け検討を重ねていくという。

玉川貴子報告「新聞報道からみる都市の火葬待機問題」では、いままでの 4 報告では、作法書というプリントのテキストを中心に検討を行っていたが、本報告では新聞という印刷メディアを素材に冠婚葬祭の情報、とくに火葬待機という現代的課題の取り扱いについて検討している。名古屋市の遺体放置問題に関しては、当初、火葬遅延の理由としてコロナ禍を挙げていたが、実は遺族確認の長期化による遅延が背景にあることの報道に変わっていった。また火葬件数増加報道についても、コロナ禍だけでなく、死亡人口の増加を理由とするように変わってきている。こうして、コロナ禍を要因とした報道は実は死亡人口の増加や家族関係の変容など、社会的変化が背景にあり、説明の正統性の変化について考察している。

以上のように、冠婚葬祭と情報化の研究プロジェクトにおいて、とくにプリント班における多様な課題が見いだされ、研究をそれぞれ継続しており、来年度以降の展開が期待される。